

角 川 新 書

— 41 —

文 學 と 人 間

百 十 一 章

伊 藤 整



伊 藤 整

1905 年 1 月 北海道松前郡白神村に生る

東京商大中退

現 在 東京工大講師、文藝家協會理事

著 書 “雪明りの路”、“得能五郎の生活と意見”、“鳴
海仙吉”、“伊藤整氏の生活と意見”、“火の鳥”、
“小説の方法”、“青春”、“典子の生きかた”、等

文學と人間百十一章



昭和二十九年七月十一日 初版印刷
昭和二十九年七月十五日 初版發行

定價 百圓

著 者 伊 藤 整

發行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 佐 光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發 行 所 株式會社 角 川 書 店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番

電話九段 (33) 〇二二(代表)

落丁・鼠丁本はお取替え致します

Printed in Japan 曉印刷・本間製本

・角川新書

文學と人間

百十一章

伊藤 整



目次

九州の旅	九	正直ということ	二九
體重	二	裁判というもの	三三
少女の涙	三	小説家の地位	三三
笑	四	大江卓と兒島惟謙	三五
賣文業	六	男女同權	三七
揮毫	六	寒國と暖國	三九
ダンス	七	横光利一の生き方	四二
長崎	三	師匠と弟子	四三
雲仙	四	文士生活	四四
藝人と藝術家	六	弓の話	四七
落第生	七	スキイの話	四八

奥様
女性とは
妻という職業
キリスト
怖るべき標語
二匹の兎
型破り
競争の世界
讀書家と學者
専門家とは
索引というもの
自殺
歴史の面白さ
抵抗感
信仰と氣やすめ

成島柳北	意地悪	美女の魅力	老人の顔	分らないもの	形と意味	人を使う人	お體裁の眞心	ドストエフスキイ	新聞の歴史	つきあい	愛の悩み	男性とは	人間の愛	青春の苦しさ
五〇	五三	五四	五五	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三	六四	六五	六六
六七	六八	六九	七〇	七一	七二	七三	七四	七五	七六	七七	七八	七九	八〇	八一

明治時代の立身出世	一九	人間の不幸	一九
現代の立身出世	二〇	行爲と智慧	二〇
秩序なるもの	二三	男性よ努力せよ	二三
新しい繪	二四	ユリセスの話	二四
學者の出世	二六	アキレスの話	二六
自由の行きづまり	二八	サイレンの話	二八
ナニワ節	三〇	シュリーマンの話	三〇
大衆文學と純文學	三三	一葉の生い立ち	三三
シェークスピア	三四	一葉と花圃	三四
死による考え方	三六	一葉の人となり	三六
シャカの教え	三八	一葉の苦惱	三八
イエスと孔子	三〇	使うべき駒	三〇
社會と文學	三三	スポーツ	三六
私的一天	三四	弱點即ち長所	三三
日本語の文章	三六	人の影響	三六

妥協というもの	一七〇	日本の思想	一九五
組織と自由	一七九	近代人のエゴ	一九七
政府とは何か	一七二	フロイドの思想	一九九
笑と批評	一七三	ローレンスの思想	二〇一
敏感な人のために	一七四	有名人とは何か	二〇三
本の必要	一七五	最後の判断者	二〇五
新聞の功罪	一七六	過去は生きている	二〇七
藝術の必要	一八〇	仕事の難所	二〇九
藝術の進歩	一八三	文人の筆名	二一一
私小説	一八四	文章とは何か	二二三
仕事の本質	一八六	形式と眞實	二二五
ヨハネとサロメ	一八八	酒	二二七
イエスと母	一九〇	人間の平安	二二九
情緒	一九二	終りの言葉	二三二
ジャズについて	一九三		

文學と人間 百十一章

九州の旅

九州の大水害（昭和二十八年）は六月二十六日である。熊本におけるこの時の災害を、多くの人々の體驗記錄、寫眞、海老原喜之助のデッサンなどで一冊の特集をした『日本談義』が、編輯者の荒木精之君から送られて來た。暗闇の中に悲鳴を残して流されて行つた人、蔵書を全部失つた學者、偶然や努力によつて辛くも助かり、他人を救い出した人、家と資材を一夜に失つた人々、心のいたむ記事ばかりである。洪水と地震と火事は、絶えず日本をおそつてゐる災害であり、その上戦争まで好きな民族だつたのだから、われわれは心やすまることがないというべきだ。

私が九州へ行くのはこれが初めてである。熊本を私が訪れたのは、この年の六月六日であるから、ちょうど水害の二十日前であつた。『西日本新聞』の世話で、角川書店主催の文藝講演會を、九州各地で催す企てがあり、川端康成、大岡昇平の二氏と私とが講師、角川源義氏が同行した。

九州は私の友人の何人もが關係のある土地である。上林曉、福田清人、永松定、森本忠、那須辰造、蒲池歡一など、九州の土地で文學に關心のある人なら名を記憶しているにちがいない。これ等の人々と、昭和六年ごろ私は『新作家』という雑誌と一緒にやつた。それ以後、五高出身の上林、森本、永松君たちから熊本の話はずいぶん聞いた。海老原喜之助、荒木精之氏などもその少し後からの知人である。その時二十歳代であつた上林、永松君たちは、いま五十歳前後になつてゐる。

また私は、日本の文士や評論家たちの経歴と仕事を織り込んだ文壇史というのを、二年前から書いている。前に『西日本』に野田宇太郎君が九州の文學史跡のことを書いていたようであるが、熊本は明治の日本の思想と文學の發展に大きな役割をした土地だ。

熊本の出身、また熊本に縁のある文人、思想家としては、徳富蘇峰、蘆花、夏目漱石、寺田寅彦、小泉八雲、金森通倫、矢島楫子、海老名弾正、内村鑑三など、明治文化の歴史をしらべると多くの人々の婆が浮かんで来る。

折にふれての舊友の話題や、明治文學史の研究から、熊本という町についての私の豫備知識と關心は、普通の人よりも多かつた。六月五日の夜半に板付飛行場に着いた時は雨、六日の一時、汽車で福岡から熊本に着いた時は晴れ間があつたが、三日から四日にかけて九州をおそつた小型颱風のあとのことで、天氣は落ちつかなかつた。

民生館での講演やサイン・パーティのあと、私たちは大急ぎで荒木、永松の二君に案内されて文學史跡まわりをした。熊本城からだいたい地理を見さだめてから、八雲、漱石の舊宅の前に立つたり、徳富家の舊居の庭先に入れて頂いたりした。東京では見ることもなくなつた明治の建物、明治の街路の感じが、熊本には濃く残つていた。

翌日福岡で會があるので、夕方の汽車で立ち、鳥栖から二日市の宿まで車を走らせた時、本式の雨になつた。水は田や小川に満ちていて、溢れそうになつていた。もうこの時から九州の土地は吸えるだけの水を吸つていたのだ、と後で思い合わされるほどだつた。

體重

いま九月になつてから考えると、ことしの氣候はいろいろな點で不順であつたことが分る。六月のはじめに颱風があるというのがすでに當り前でない。私たちが東京を出發する六月五日、九州方面が颱風だということで、午後三時に出る豫定の飛行機が、だんだん延びて午後七時半に出發した。

私は飛行機に乗るのがはじめてだから、日本内地の旅客機が夜間飛行をする、という平凡なことも知らなかつた。その飛行機は九時四十五分に大阪に着いて、そこでまた一時間餘も待たされて、午前一時頃に板付に着いた。

飛行機に乗っている感じは、要するに大型バスと同じもので、何の變テツも無い、と言える。隣の人と話をするのも、汽車やバスよりよく聞えるぐらいだし、動搖は大きな汽船でいどのものである。ただ夜の都會の上を飛ぶ時は、星の海の上を飛ぶように美しいことがちがう。大阪の街の上をセンカイしているとき見下すと、その火の海のような街上で、自動車と電車だけが生きて動いている昆蟲のように見えた。もし何人かが外の星から望遠鏡で地球をのぞいたら、この火の海の地球の表面で、火を放ちながら動きまわるカブト蟲のような自動車とムカデかゲジゲジのような電車や汽車だけが生物だと思われるだろう。しかし、もし、火星などに優秀な人類のような生物がいて、その中の學者たちは、地球には、目には見えないが、あの昆蟲のやうな動物に寄生して、それを動かしている寄生蟲かバイキンのやうな

生物が別に存在しているはずだ、などといい出すかも知れない。

六日の夜、熊本での講演をすまして到着した二日市町、武藏温泉というので、大丸別荘というたいへん大きな歩いていて方角に迷うような宿にとまった。川端康成氏と湯に入るとき、ぼくが臺秤に乗ると、川端さんが、君はいくらありますか、と聞いた。ぼくは自分の正確な目方を人に言わないことにしている。肉體、財布、人格、贈玉等は、重く厚く大きいのが日本では尊重されている。その中の財布は他人の拂い方しだいで重くも軽くもなるが、他の三つは、私においては常に軽く、薄く、小さいことを、私は自覺している。

しかし、川端さんは、目方だけは私より軽いらしいので、私は安心して「十二貫五百です」と言つた。「エライですね」と川端さんが言つた。そして御自分の目方は言わなかつた。私がある言い方から推定すると、川端さんは私より一貫目は軽いはずである。私より軽い人と一しよに湯に入るといふ機會は、割に少いのである。そこで私は大兵型の大岡君に聞えないように言つた。

「軽い方が安全ですからね」

私が初め川端さんに逢つた時、私は二十六歳位で、川端さんは六つ年上だから三十二歳位であつた。二人ともその年齢では、明日をも知れぬような結核適應型であつた。しかし私が四十九で川端さんが五十五になつたいま、私たちは、太つた頑丈な外形の人びとよりも高い安全率をもつて生きている。

「そうですね」と川端さんがいつた。

少女の涙

六月七日の朝、車で福岡へ出る途中、太宰府天満宮へ寄つた。清らかな水を配した境内は樹木が大きく、その由緒を別にしても、私がこれまでに見た神社のうちで、最も美しい神社であつた。私たちはその境内を歩きまわつた。

最近、『日歴』という雑誌の八月十五日號が私の所に着いた。これは、高見順、新田潤、田宮虎彦、澁川驍君たちが戦前に出していた同人雑誌を復刊させたものである。その雑誌に澁川驍君が『黒南風』という長い小説をずっと連載している。今月號を讀むと、大正末年ごろの話で、主人公の佐賀高校生徒がこの天満宮に戀人と遊びに行き、夕方にその横の小高くなつた場所で接吻する場面が描かれている。

その接吻のあとで戀人の目が、「眼病にでもかかつているように、異常な輝きを見せて、大きく見開いている。彼女は少しピンに亂れた髪をかき撫でた。彼女は彼の凝視に遭うと、眩しそうに二、三度まばたきしたが、そのあとで何か忘れていた痛みを思い出したような表情を浮べたと思うと、眉をよせて、鼻梁の上に押しつまつた皺を見せると同時に鼻腔に急がしいむせぶような呼氣を響かせながら泣き出した」と作者は書いている。

初めての接吻から受けた少女の心の激動を、作者は貴重なものとして描く態度をとっている。つまり私と同じ年齢の戦前型の作家の書き方だ。自傳らしい氣配の濃厚な小説なので、二十歳の澁川驍君が、この美しい神社の境内の隅で少女と接吻した場面を私は目に浮べた。戀人と逢うのに、こういう美しい

場所を持つ佐賀、福岡、久留米の青年たちは幸福である。類縁の戀でなければ、古い日本の神々はその戀を祝福するはずである。

若しも、この小説を、私が九州旅行の前に読んでいたら、私はきつと天満宮の境内を歩きまわつて、この邊かな、などと捜したにちがいない。神社に向つて右手の小高くなつたあたりであるらしい。

この女性が今の澁川夫人かどうか分らないが、その女性は四十五、六歳になつてゐるだろう。三木露風の古い詩に「故郷の小野の木立に、笛の音のうるむ月夜や、乙女子は熱き心にそをば聞き、涙ながしき。十年経ぬ、同じ心に君泣くや、母となりても」というのがある。それと同じ涙を、その少女は再び流さないであらう。

昨年の夏、私は火野葦平君たちと一緒に、文藝春秋新社の旅行で北海道へ行く豫定であつたが、行けなかつた。私は小樽の隣村で育ち小樽の學校へ入つた。火野君は小樽の花園公園を同行の河盛好藏君たちと歩いているとき、「この公園で伊藤整が戀愛をした」といつたそうである。そして同行の人々が笑つたそうである。みなが自分のことを思い出したのだろう。その話を聞いて、私も笑い、少し感傷的になつた。小樽の花園公園は、海港の眺めを持ち、その美しさにおいて、太宰府の天満宮に匹敵するものであることは確かだ。

笑

講演というものも、今では大分慣れて、私は、固苦しくなく喋ることはできるつもりである。

私は喋りながら、聞いている人の顔を見ないことにしている。要するに、人が大勢いるけれども、その群衆のなかの一人一人が、私の話にたいしてどんな反應を示すか、ということを考えずに、口にのぼる言葉を順次に吐き出し、空中に送り出してやる、という氣持で喋るようにしている。

私と川端、大岡兩氏と三人が車で福岡に向かつて走っている間に、どんな聴衆をでも必ず笑わせるような話題があるだろうか、という話が出た。「ありますね」と私はいつた。私はまだ試みていないが、この話をしたらきつと人は笑うだろうと思う話題を持つていた。

「どんな話かね？」と問われた。誰でも笑わせると言えば、さしあたり、この二人を笑わせねばならないことになる。この二人を笑わせるのは少し難かしいな、と私は思つた。二人ともヒネツた所が十分にあり、しかも心の用意ができてゐる。しかし私はキコの勢でいつた。

「ぼくにいま六つの娘がいますね、十歳ぐらいの男の子を見る度に、僕は考えるんです。ひよつとしたら、この子がウチの娘のムコになるのかも知れない」

しかし二人とも笑わなかつた。私はシヨゲた。しかし、この二人は、多分現代の日本でもつとも笑わせるのに骨の折れる人間の中の二人である。この二人をもつて日本人全部を律する譯には行かないだろう。私が學生時代に英語を習つた大變よく出来る先生で濱林生之助という人がいた。ハーディーカステイ・ダンソンの小説の講義をしている途中で、先生はいつた。

「笑うというのは大切なことです。小説を講讀していて、笑うべきところで諸君が笑うと、ああ分つ